

「佐伯町の民話・伝説」より（浅原関係抜粋）

佐伯町誌資料（一） 明治百年記念

昭和四十三年六月三十日発行

編集発行者 佐伯町 佐伯町教育委員会

山王神社のおさん猿（伝承場所 小瀬川ダム）

浅原と山口県美和町にまたがる小瀬川ダムは満々と水をたたえ、四季折々の景色を映して、何事もなかったように静まりかえっている。

昭和三十九年ここに多目的ダムができ、旧浅原村に属していた市井原集落は湖底に没したが、そこには「サルのおさん」にまつわる物語があり、集落を後にした人たちの甘い郷愁をそそる。

市井原の中央に祠まつられている方メートルばかりの山王（さんのう）神社一帯は、深い朝霧に包まれていた。鉄砲撃ちの熊一が山王神社に朝早く一匹のメスザルが参るという話を聞いたのは、一週間ばかり前のことだった。熊一は「シメた」と思った。夜の間に十分鉄砲の整備をして、家人には内証で、まだ明けきらない朝霧の中へ消えて行った。

熊一が山王神社に近い大きな栗の木の根元まで来ると、祠ほらの輪郭がぼんやり見えてきた。彼は栗の木の根元にしゃがんで祠の方を凝視した。サルは、なかなか現れない。

やがて霧も少しずつ晴れて、祠の古びた屋根や柱がはつきりと見えてきた。そのとき熊一は、山王神社に向かって来る身の丈一メートルもあるうかと思われるメスザルを発見した。熊一の胸は早鐘を打ち、やがて「ヨシッ」とつぶやきながら鉄砲を構えた。

するとサルは鉄砲に気づき、懸命に自分の腹を指しながら頭を下げたり起こしたりした。熊一には、サルのお腹に仔が宿っているので仔ザルの命乞いをしているのだとわかった。熊一の脳裏には瞬間戸惑いを感じたが、指は引き金を引いていた。

「……」

母ザルはうずくまり、硝煙の臭いが異様に熊一の鼻をついた。

「山王んさのバチが当たったのじゃ」

サルを撃つて間もなく狂い死にした熊一のことを集落の人たちはあざけり、無慈悲さをののしつたが、以来熊一の家には男の子が育たず、養子をとって家系を継ぐようになった。誰言うことなく熊一に撃たれて死んだメスザルのことを「おさん」と言うようになった。

注 山王神社は転じてサルノオと言い、神社にサルを祠まつった伝説につながるものと思われる。

文中の熊一は仮名で名は明らかではない。

サヤの神と古刀（伝承場所 保曾原）

三興中学校から、およそ五百メートル南の県道を行くとK氏の家がある。家の裏手に面して一群のクロガシが茂り、シメ縄を張った中に長さ五十五センチ、幅二・七センチの日本刀が黒くさびてさかさまに土中に立っている。

伝説によれば明治維新に長州の侍がこの刀を持って戦いに出たが、枕辺に異様な人影が現れ、「刀を元の場所に返せ」と言ったので、この場所へ返還したという。

一説には河野家の先祖が持って来た高田氏の名刀と言い、名刀ゆえに、ここに祠まつって神体にしたと言う。この刀に触れる者は足が立たなくなり、この林に入ると皮膚病にかかると言われる。

枇杷（びわ）が原（伝承場所 郷）

鎌倉時代か室町時代と思われるころ、浅原の戸屋原峠を越えて、若い娘に供なわれた一人の琵琶法師がやって来た。村人たちは誰もこの目の不自由な法師父娘の素性を知る者はなかったが、なんでも上方（かみがた）大阪方面から流れて来た者で、周防国へ向かう途中だということだけ聞いていた。

当時は戸屋原を過ぎて郷に至る一帯は起伏の多い山道で、うつそうとした樹木に覆われ、郷集落にはわずか十戸か十二戸の民家

しかなかった。琵琶法師父娘は、ようやく郷集落に近い松林の中まで来たが道に迷い、旅の疲れと飢えのためその地で死んでしまった。

現在の郷の亀山神社に近い丘は一面の水田になっているが、このあたり一帯を枇杷が原と言い、琵琶法師の父娘が死んだ所と伝えられる。

風呂の谷と軍用金（伝承場所 郷）

戦国時代と思われるころ、一人の武将が郷の風呂の谷という山の中に多くの軍用金を埋めた。その時の武将は山案内と軍用金を埋める手伝い役に、宮地という男を連れて行き、金を埋めた場所の目印にナンテンの木を植えておいた。ところが、武将は宮地が、この事を他言する事を恐れて、帰り道で宮地を殺して土中に埋めてしまった。以後、この谷を宮地が谷と呼ぶようになった。

その後、この伝説を聞いた農夫が、風呂の谷でシバを刈っていたら偶然、そのナンテンを発見した。農夫は持っていた手ぬぐいをナンテンに縛りつけて目印にし、急いで鋤を取りに帰ったが、

再び行つて見ると手ぬぐいは、そのままになっていながら、不思議にもナンテンの木は、どこにも見当たらなかった。